



野寄雅博さんが逝った。前期までセンター事業団の専務として奮闘され、労協連副理事長としてご一緒する機会を持ってないままの別れだった。歳は一回り以上ちがっても、昭和61年4月1日付採用の、唯一残っていた事務局員の同志だった。

センター事業団の経営危機の時代も含め、一貫して組織の下支えに徹してこられた。その存在を失い、すっぱりと組織の中に大きな空白ができた思いである。地道でまじめ一辺倒な人柄と、屈託なくはじける笑顔が、脳裏から離れない。別れの朝から毎日、森山直太朗の「桜」を聞く日々が続いている。11月27日夜には、追悼の集いを予定している。

小林基愛さん、菅野正純さん、中田宗一郎さんと、辛い別れが続いた。法制化によって物語の序章が終わろうとしている今、彼らの無念を引き継ぐとしても、拭い切れない思いを抱きながら、序章のエンディングを闘い抜かねばならない。

民主党政権の発足から、法制化の実現可能性は格段に高まったものの、民主党と政府の間にギクシャクした新しいハードルも

表れている。折しも、雇用失業情勢の悪化に歯止めがかからない中、「緊急雇用対策」が発表された。年度内に100万人の雇用創出を、という方針であり、その主要分野は、①介護、②グリーン(農林業・環境・観光)、③地域社会である。

全国では今、職業訓練・基金訓練の企画提案が広がり始めている。なかには、来春高校を卒業する「新卒無業者」向けの企画提案を求められている県もある。社会は今、この職業訓練を、これまでとはまったく異なる位置づけと内容を伴った、新しい公的な就労保障システムとして構築することが求められている。また、学校と社会の間をつなぐ、新しい教育システムとしても展望していく必要がある。その根底に貫かれるのは、「他者と共に生きる」、孤独と孤立の徹底解消である。そこに「協同」の必要性が存在し、「働く現場」から「協同労働」を発信する意味がある。

社会の根底からの変革は、関係の変革であり、全ての命が生きる地域と社会に向けて、どんな関係を呼びかけていくのかが問われている。



ご存知の方もおられると思いますが、「ガイアの夜明け」(TV東京系)というテレビ番組で、「新しい働き方」という特集が生まれ、そこで協同労働が取材されました。

現時点においてどのような内容に編集されているのかはわかりませんが、二週に渡って放映される予定で、第一週目の内容ではバブル崩壊後の行き過ぎた成果主義を見直

し、日本型経営の基盤であったチームワーク重視の働き方や、さらに人生のステップごとのオルタナティブな生き方、選択肢としての働き方がいくつか紹介されていました。こうした働き方のひとつとして「協同労働」へも期待が寄せられています。

最近では現場の仲間たちの取組みがメディアに取り上げられることもしばしばです。こうした追い風は中高年の失対事業から始まった労協運動がいまや裾野広く世間へ広がっていることが実感されるのと同時に、社会が閉塞し、人びとの支え合いのシステムが崩壊した時代にこそ、この「協同労働の協同組合」という働き方がさまざまな人たちから切実に求められているという事実をもあらためて認識させられます。特に社会的ハンディを持つ人びとにとって、皆が互いに支え合いながら働くという仕組みは自立への機会にもつながり、人としての尊厳にも関わるものです。そうした意味でもこの働き方を支える社会の制度として、「協同労働の協同組合」法制化の実現が待ち望まれます。

さて先日、協同総研副理事長の中川雄一郎先生からのお知らせで、英国の社会的企業「アカウント3」という団体代表の方の講演会を明治大学で聴く機会がありました。この団体は英国ロンドン市内の貧困区で、職業訓練などをもとにコミュニティ・ビジネスをおこし、バングラディッシュなどエスニックマイノリティの女性のための社会的・経済的自立を女性が中心となって支援する活動を行っています。協同組合法人

を取得し運営にあたり、女性たちが自分たちの住む地域の中で雇用創出・仕事おこしを行うための創業資金や雇用サポートをしており、協同組織金融も立ち上げ、活動しているそうです。

事業運転資金は行政が十分に掌握できていなかったエスニックマイノリティの実態に沿った情報などをリサーチする委託事業や、さらにそこからわかったニーズに基づき事業（語学学校や職業訓練といった教育や福祉事業との連携事業など）を立ち上げてきました。こうした女性による仕事おこしが地域を活性化し、いまやこの地域自体の再生につながっているそうです。講演会後の懇親会で代表を務めるメレデューさんとお話しした際に、彼女が「これは女性ならではの活動だと思う。男性では見落とされていたであろう視点を我々は見逃さなかった」とおっしゃっていたのが印象的でした。

一方、英国に負けず日本の女性たちも元気です。先日札幌で行われた協同組合学会でお会いした女性はイチゴ栽培に挑戦し、それを地域の女性たちにも広めていきました。そこから地域一帯がイチゴの観光農園として知られるようになり、さらに彼女は長年の夢だったアイスクリーム屋やファーマーズレストランを展開していきます。お店のいちばんの売りはそこに広がる農家の風景で、その美しい四季折々の自然に魅せられたリピーターが定着し、その人たちを巻き込んでお店の運営にサポーター（お客さん）として皆が思いおもいに参加しています。もちろん地域への波及効果は大きく、

地域自体が活気づき、景観づくりなどを住民皆で行い、さらに地域内での雇用創出も始められ、今後の展開がとても楽しみです(11月26日(木)、「農村女性の仕事おこしー手作りアイスから地域づくりへ」と題し、小栗美恵さん(ファーム花茶代表)にお越しいただき、学習会を行います。ご参加ください)。

また、12月に行う協同総研の「農村村再生と協同労働の可能性を考える」研究会フォーラムにご出演いただく静岡県天竜市の「NPO夢未来くんま」でも農村女性によるまちづくり、仕事おこしが活発です。

この団体は地区の全戸が加入しているNPO法人で、過疎高齢化していく地域をなんとかしようと農家のお母さんたちが中心に、味噌やそば、五平餅などの農産物の加工品の生産やお茶や木工製品など地域の特産物の開発を協同出資で行っています。さらに、都市との交流や新しい産業育成、安心して住み続けられる地域づくりとして

高齢者への給食ボランティアなどの福祉事業や次世代教育、地域の景観や環境保全といった事業にまで広がりを見せています。

お話を伺い、彼女たちの活動のきっかけのひとつに共通していたのは「自分のお財布を持ちたかった」という背景が浮かんできました。皆さんのお話から、子供の運動靴を買うにも気兼ねしていたなかでわずかでも自分で自由になるお金ができたことで彼女たちの意識がどれほど解放されたかが痛いほど感じられました。

取っ掛かりは目の前にある小さな地域の資源で、それに目を向け、生活に根付いた伝統や文化から方法を得て仕事をおこしていく農村女性のまちおこしがいま各地域を元気づけています。12月のフォーラムではそうした、まちおこしにおける男女間のちがいなども見られるかなと楽しみにしています。今年最後の協同総研のイベントです。皆さん、ぜひお誘い合わせのうえ、お越しください。

新入会員(2009.10.1～10.31)

豊島 操(労協センター事業団本部)

研究所活動日誌

10/01(木) 「森の巣箱」訪問交流(高知県津野町／島田、古谷、田嶋、榎本)

10/02(金) 愛媛県久万高原町訪問(島田、古谷、田嶋、榎本)

10/03(土) 広島協同集会実行委員会(田嶋、

榎本)／全国縦断シンポジウム in 神戸

10/05(月) 法制化市民会議幹事会／生活底上げ会議(田嶋)

10/06(火) 第3回「食・農・環境」推進会議